

基礎研 レター

ケガや病気に対する不安の変化と 医療機関受診状況

保険研究部 研究員 村松 容子
e-mail: yoko@nli-research.co.jp

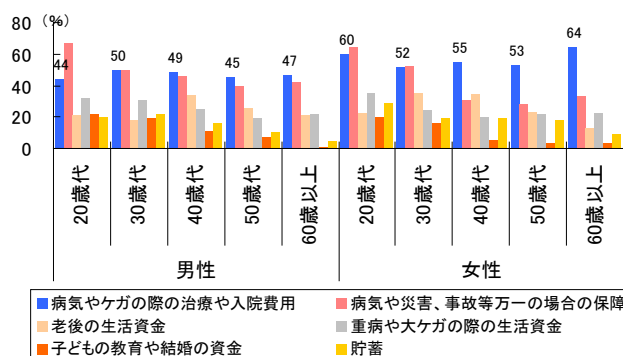
医療保険は、性別や年齢を問わずあらゆる層が加入している商品である（図表略）。ニッセイ基礎研究所で行っている「生命保険マーケット調査」によれば、今後、生命保険に加入する場合の加入目的をみても「病気やケガの際の治療や入院費用」は、他の目的と比べておおむねあらゆる性・年齢層で高い（図表1）。しかし、医療機関の受診状況や、病気やケガに対する不安は、性・年齢別に異なると考えられる。現在売られている医療保険は、終身保障するものが主流となっているが、実際は、医療保険加入時に興味をもつ保障の内容は性・年齢ごとに異なる可能性があるし、加入後も年齢を重ねるごとに関心の対象は変わっていくものと考えられる。

本稿では、性・年齢別の受診状況やケガや病気に対する不安がどれほど異なるのかを概観する。

1——受診状況や医療費は性・年齢によって異なる

受療率や医療費は、年齢が上がるほど高まる傾向がある。「2011年患者調査」で、入院受療率²が高い疾病の上位3分類を性・年齢別にみると、性・年齢を問わず「精神及び行動の障害」が多いほか、45歳未満の男性と65歳以上の女性では「損傷、中毒及びその他の外因の影響」（いわゆるケガなど）が多く、45歳以上の男性と50歳以上の女性で「循環器系の疾患」（脳血管疾患や心疾患など）が、50歳以上の男性と30歳以上の女性で「新生物」（悪性新生物を含む）が多い（図表2）。また、1回

図表1 今後加入する場合の目的(上位6項目)



(注) 数字は、「病気やケガの際の治療や入院費用」の割合
(資料) 2011年度生命保険マーケット調査

¹ 全国20~69歳男女個人(5,525人)を対象とし、インターネット調査により回答を得たもの。年齢の内訳は、20歳代793人、30歳代1166人、40歳代1090人、50歳代1157人、60歳代1319人。

² 入院受療率とは、調査日当日に入院している患者の推計数を人口10万人対であらわした数。

の入院における平均在院日数³は、年齢とともに長くなる傾向があり、20歳代では男女とも10～20日程度であるのに対し、60歳代では男女とも30日程度、65歳以上の女性では50日程度となっている(図表3)。男女を比較すると、50歳未満では男性が女性よりも長い傾向がある。

次に、「2010年度国民医療費」で、人口一人当たりの医療費⁴が多い疾病の上位3分類をみると、男性の15～64歳と女性の15～44歳は「精神及び行動の障害」が、15～44歳男性は「損傷、中毒及びその他の外因の影響」(いわゆるケガなど)が、45歳以上の女性は「筋骨格系および結合組織の疾病」(骨粗しょう症や関節症など)がそれぞれ多い(図表4)。また、45歳以上では男女とも「循環器系の疾患」が多く、45歳以上の女性で「新生物」が多い。こういった医療費が高い疾病は、入院受療率が高い疾病(図表2)とおおむね同様となっている。

2—不安内容は性・年齢や家庭での役割によって異なる

ケガや病気に対して不安に感じる内容も性・年齢別に異なる。生命保険文化センターの「2010年度生活保障に関する調査」で、病気やケガに対する不安内容16項目のうち、上位5項目をみると、年齢別では若年層で「不慮の事故」が、50歳以上の高年齢層で「三大疾病」や「先進医療の費用」がそれぞれ上位にあげられている(図表5)。これらの結果は、実際の受診状況(図表2や図表4)とおおむね整合的である。一方、若年層でも「長期入院の費用」が上位にあげられているが、実際の受診状況(図表3)から見る限り、若年層が長期の入院をする可能性は低い。したがって若年層の「長期入院の費用」への不安とは、現在の不安というよりは、むしろ将来に向けての不安

³ 退院した患者のその入院における在院日数の平均。

⁴ 入院と入院外をあわせた総額。

図表2 入院受療率が高い疾病

【男性】		20～29	30～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65歳以上
1位		精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	循環器系の疾患
2位		損傷、中毒及びその他の外因の影響	損傷、中毒及びその他の外因の影響	損傷、中毒及びその他の外因の影響	循環器系の疾患	循環器系の疾患	新生物	新生物	新生物
3位		神経系の疾患	神経系の疾患	神経系の疾患	神経系の疾患	新生物	循環器系の疾患	循環器系の疾患	精神及び行動の障害

【女性】		20～24	30～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65歳以上
1位		妊娠、分娩及び産じよく	妊娠、分娩及び産じよく	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	循環器系の疾患
2位		精神及び行動の障害	精神及び行動の障害	新生物	新生物	新生物	新生物	新生物	精神及び行動の障害
3位		神経系の疾患	新生物	神経系の疾患	神経系の疾患	神経系の疾患	循環器系の疾患	循環器系の疾患	損傷、中毒及びその他の外因の影響

(注) 疾病の種類は、WHOのICD10の分類による。医療保険で給付対象外とされる分類も含むが、ここでは全疾病種類を対象にした。

(資料) 厚生労働省「2011年患者調査」

図表3 平均在院日数(性・年齢階層別)

		(日)									
		20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65歳～
男性		14.1	17.9	20.6	26.6	25.7	30.6	26.5	29.9	32.5	37.5
女性		11.1	9.6	10.4	11.6	16.8	22.5	25.1	26.2	29.1	50.5

(資料) 厚生労働省「2011年患者調査」

図表4 医療費が高い疾病

【男性】		15～44	45～64	65歳以上
1位		精神及び行動の障害	循環器系の疾患	循環器系の疾患
2位		損傷、中毒及びその他の外因の影響	新生物	新生物
3位		呼吸器系の疾患	精神及び行動の障害	腎尿路生殖系系の疾患

【女性】		15～44	45～64	65歳以上
1位		新生物	新生物	循環器系の疾患
2位		精神及び行動の障害	循環器系の疾患	筋骨格系及び結合組織の疾患
3位		妊娠、分娩及び産じよく	筋骨格系及び結合組織の疾患	新生物

(資料) 厚生労働省「2010年度国民医療費」

である可能性がある。

性別にみると、男性の就労年代で「障害等による就労不能」や「治療の長期化で収入が途絶える」が、女性で「後遺症や障害」が、それぞれ上位にあげられている。また、女性では「家族の肉体的・精神的負担」が男性より上位になっている。男性は家計を支えているケースが、女性は家事を行っているケースがそれぞれ多いことや、女性は循環器系疾患の中でも脳血管疾患リスクが高いなど要介護

図表5 病気やケガに対して感じる不安内容

【男性】		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
1位	不慮の事故	長期入院の費用	長期入院の費用	長期入院の費用	長期入院の費用	長期入院の費用
2位	長期入院の費用	公的医療保険だけでは不十分	公的医療保険だけでは不十分	公的医療保険だけでは不十分	公的医療保険だけでは不十分	公的医療保険だけでは不十分
3位	公的医療保険だけでは不十分	後遺症や障害	障害等による就労不能	家族の肉体的・精神的負担	三大疾病	家族の肉体的・精神的負担
4位	後遺症や障害	家族の肉体的・精神的負担	治療の長期化で収入が途絶える	障害等による就労不能	治療の長期化で収入が途絶える	三大疾病
5位	障害等による就労不能	治療の長期化で収入が途絶える	治療の長期化で収入が途絶える	治療の長期化で収入が途絶える	家族の肉体的・精神的負担	先進医療の費用
【女性】		20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
1位	家族の肉体的・精神的負担	長期入院の費用	長期入院の費用	長期入院の費用	長期入院の費用	長期入院の費用
2位	長期入院の費用	家族の肉体的・精神的負担	公的医療保険だけでは不十分	公的医療保険だけでは不十分	公的医療保険だけでは不十分	家族の肉体的・精神的負担
3位	不慮の事故	公的医療保険だけでは不十分	家族の肉体的・精神的負担	家族の肉体的・精神的負担	公的医療保険だけでは不十分	公的医療保険だけでは不十分
4位	公的医療保険だけでは不十分	不慮の事故	後遺症や障害	後遺症や障害	後遺症や障害	後遺症や障害
5位	後遺症や障害	後遺症や障害	障害等による就労不能	先進医療の費用	三大疾病	三大疾病

(資料)生命保険文化センター「2010年度生活保障に関する調査」

状態になるリスクをもつ疾病になる可能性が高いことも、不安の内容に反映されていると考えられる。

3—自分のニーズにあっているか確認し続けることが重要

医療保険は、あらゆる性・年齢に需要がある商品である。また、現在、医療保険は終身保障が主流となっており、同じ保険事故が発生すれば性・年齢、家庭における役割によらず一定額が給付されるものが多い。

しかし、これまでみてきたとおり、受診状況や病気やケガに対する不安は性・年齢によって異なる。つまり、医療保険加入時に関心をもつ保障の内容は性・年齢ごとに異なる可能性があるし、加入後も年齢を重ねるごとに関心の対象は変わっていくものと考えられる。したがって、消費者は、医療保険加入後も、自分の保障ニーズに合っているか機会あるごとに確認をしていくことが必要だろう。また、保険会社も年齢や家庭内における役割ごとにリスクがどのように変化し、各商品がどのようにそれぞれのリスクをカバーするか説明することが必要だろう。